

課程博士の学位授与申請に係わる審査報告書

学籍番号 15DC1603
氏名（本籍） 張 婷（中国）
学位の種類 博士（中国研究）
報告番号 甲 第 132 号
学位授与年月日 2024（令和6）年3月20日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
論文題目 萧红创作论——以《生死场》《呼兰河传》
《马伯乐》为中心

審査委員
主査 黄 英哲
副査 桑島 由美子
副査 薛 鳴



2024（令和6）年2月15日
愛知大学大学院中国研究科

【論文審査の結果の要旨】

本博士論文『蕭紅創作論——以『生死場』『呼蘭河伝』『馬伯樂』為中心』は、極めて完成度の高い、中国の著名な現代作家である蕭紅の「作品論」研究である。本論は序論と結論を除く全四章から構成されている。第一章「蕭紅早期的文学活動」では、主に蕭紅の初期の文学活動について考察し、第二章「《生死場》的世界」では、蕭紅の名声を不動にした作品『生死場』について論じている。第三章「《呼蘭河伝》:個人回憶体小説」では、蕭紅個人の回想形式で書かれた作品として最高峰である『呼蘭河伝』について検討し、第四章「『馬伯樂』:逃難小説」では、蕭紅の長編小説『馬伯樂』について論じている。結論について言えば、論理的にも極めて透徹した見解が提起されており、本論執筆者は、蕭紅作品の魅力は、読者が彼女の眼差しを通して、生活の風紀規範として彼女の観察力に依拠し、世界を「視る」事であり、其処には感情の通った筆致で、生活の「発見」が精彩に充ちて再現されている点にあると指摘する。更に高次の次元に於ける、個人の悲劇的境遇の感受を通した、生命の意義に対する重層的思考、人間の苦難に対する深遠な思い入れと思慮を呈現している、とする。その創作の特色は、彼女が帰属するとされる左翼文学とは一定の距離を保ち、また女性として必然的に帰属する女性作家群とも似通っていない。その極めて個人化した書写により、現代文学に於いても比類無い作品となっている。

本博士論文執筆者は、大量の蕭紅の伝記的資料を解読し、蕭紅の初期の文学活動時期を考察する上で、諸処の議論と論点を包摂し、解析しつつ論述する執筆方法を採用している。伝記資料と、蕭紅の生涯と彼女の創作を紐解きながら、逃婚により、呼蘭河の町に逃れ、哈爾濱に辿り着くまでの経緯について詳細に論述している。蕭紅は同じ東北出身の作家蕭軍の助力に拠り、文学創作への歷程を歩み始め、蕭軍と蕭紅は合集『跋涉』を出版している。文学創作の傍ら、蕭紅は積極的に「牽牛坊」文化サロンに参加し、金劍嘯、馮詠秋、羅烽等の東北左翼作家達との邂逅に拠って、東北左翼文化中核圏の中枢に入っていく。執筆者は、伝記資料を歴史的現場に還元して再現し、蕭紅が故郷を離れて困窮流浪の生活に身を置き、蕭軍の協助に依拠して、漸く東北左翼文壇に登り詰めるまでの経緯を明らかにした。その他、執筆者は史料を詳細に駆使して、『生死場』の出版により名声を博した彼女が、魯迅の援助に依拠していた背景についても論述している。論文では、文学と史学の双方向から解明、実証する方法で、蕭紅の人生経歴と文学創作との関係を明らかにし、蕭紅の一生は流浪の生涯であり、放浪生活は彼女の特異な生活体験にその淵源が有り、女性の成長に伴う痛

苦と生命悲劇と言う痛ましい経験を、源泉としている、とする。また、蕭紅は生涯に於いて二度子供を手放しており、そのためか彼女は『商市街』という作品の中で、子供を遺棄したトラウマを表現している。本博士論文は、『生死場』『呼蘭河伝』『馬伯楽』の三作の小説を巡り、大量の史料を用いて蕭紅の生涯と創作過程について述べている。

本博士論文は、蕭紅伝記研究として重要な先行研究を掌握し、独自に展開させている。中国人研究者季紅真著『蕭紅大伝』、葉君著『從異郷到異郷：蕭紅伝』、日本人研究者平石淑子の『蕭紅伝』、アメリカ人研究者葛浩文(Howard Goldblatt)著『蕭紅評伝』といった四部の伝記的研究は、蕭紅研究において極めて代表的な著作である。蕭紅研究の道程は 1930 年代から、既に八十年近くが経過している。魯迅、胡風や茅盾らは、蕭紅評価の歴史的変遷に於いても、均しく重要な役割を担っており、『生死場』の情趣に対する曲解した意味づけは、蕭紅の後期創作への重視と、蕭紅自身の価値の発掘に対して一時は大きな抑圧となった。アメリカ人研究者葛浩文は、『蕭紅評伝』の中で、80 年代に沸き起こった「蕭紅熱」を詳らかに揭示し、『生死場』再評価の熱潮を引き起こした。『生死場』執筆の意義を多方面から掘り起こすにつれて、蕭紅創作の全貌に対する描述にも転機が齎され、蕭紅は抗日作家として名声を極めると同時に、その作品の題材と独特な風格によって、中国現代文学史に於いて、一層重要な位置を占めるようになった。

本博士論文の卓抜な特徴は以下の三点に帰納される。

一、本論執筆者は、『生死場』はその過程で小説の主題を改変し、農民生活から抗日に転換したという独自の見解を提起している。蕭紅が『生死場』を執筆した元来の意味は、彼女の個人的な日常観察と生活体験を素材に仕立てる事に有り、彼女の故郷の農民生活や、彼らが生死の臨界で足掻く状況について、迫真の筆致に拠って描かれている。その主要な目的は、民衆を扇動して、実際に抗日行動を喚起させるものでは無い。執筆者は、蕭紅は『生死場』と言う作品は、執筆の過程で小説の主題を、農民生活から抗日へと切り換えたと考える。蕭紅には蕭軍のような「義勇軍戦士」の实地の経験はなく、また実際に日本侵略者の暴行を目の当たりにした事も無い。因って、彼女のこの方面の描写には真実味が欠如しており、筆致は想像力に欠け、感情が伴わない為、読者の共鳴を引き起こすには至らなかった。『生死場』の中の「生に対する堅固さと死に対する足掻き」に対する「紙を突き通す程の力強い」表現は、実に生命の生存と死亡の狭間の境界を開放し、蕭紅は「精緻な観察と卓抜な筆遣い」によって、直接的に生命本体と、原生態に在る生命の状態に介入し、生命の意味の変換と、それが生み出す命題とを見つめている。

二、『呼蘭河伝』について、執筆者は、時空間的距離において戦時下中国から遠のくほど、

作品の執筆は技巧的に成功しているという大胆な見解を提出している。また、『呼蘭河伝』は、偉大な異端であり、魯迅が提起した「国民性改造」の伝統に単純に当てはめて理解されてはならないとし、『呼蘭河伝』が「小説らしくない」要因は、蕭紅が時間的に叙事的芸術を用いて「描」いていないことにあり、また空間的に絵画芸術をメタディスコースとしてこの小説を「描」いている事にあると解釈している。このような空間性のメタディスコースは、小説中に明暗の混在する色塊を生成するのみならず、暗に直線的な時間体としてのモダニティーの神話を解体し、蕭紅の「国民性改造」という主題に対する再認識をも提起しており、『呼蘭河伝』を抗戦時期に於ける民族生存意識と相対的に、緊密に結合させている。『呼蘭河伝』は東北地方の小さな町、呼蘭河の民衆の愚昧を批判し、一般民衆が一身に重く背負う「国民の劣根性」を暴露し、作者の中国現代思想革命に対する重苦しい憂慮を表現している、とする研究者もいる。しかし、本博士論文執筆者の見解は全く異なり、『呼蘭河伝』は、一般的に理解される中国現代文学伝統に依拠して解釈され得るものでは無いとする。つまり、蕭紅と魯迅の「国民性改造」との関係で言えば、『呼蘭河伝』は蕭紅が「魯迅に背反する」形で、魯迅が理想とする「活きた中国人」の意象を創造した作品である。執筆者は、蕭紅が「魯迅に背反した」事の意味は、魯迅の言う優れた啓蒙者と愚鈍な無知者を両極とした“五四”現代性の啓蒙神話の苦境を打破すると同時に、成功裏に魯迅への回帰を果たし、「明暗の狭間で彷徨する」魯迅と同じ立脚点に身を置いた、と解釈している。

三、執筆者は、蕭紅の長編小説『馬伯樂』は人々を驚嘆させた異色な作品であると指摘する。まず、それは、陥落した故郷東北の描写では無く、『呼蘭河伝』の童話的な叙述(童話の視点と情景)でも無いという点で、蕭紅固有の風格とは著しく趣きを異にする点について指摘している。次に、女性経験を描かず、女性ヒロインを主人公に立てない点で、一般的な女性作家の作品と異なることを挙げる。馬伯樂は、中国現代文学で曾て描かれ得ない性格を具有した人物形象である。『馬伯樂』は、「抗戦文芸」に対してある意味で「壮大な物語に反」する構成を有する作品である。蕭紅は「抗戦」の日常生活を叙述し、瑣事を描写することに注力しており、これは「抗戦スローガン」に対する擬態と、その解体でもある。

執筆者はまた、蕭紅の描き出すエゴイスト、馬伯樂は、正しく戦時下民衆の、真実の実相であると指摘する。この様な保身のみを求める精神状態は、避難する民衆の日常生活に於いては、互いに殺戮するという惨劇をも生み出す。彼女は冷酷かつ諧謔的な描写で人々が淞江橋に突き進む情景や、中国民族本体に根差す劣根性を余すところなく暴露している。蕭紅は戦時下の民衆の、真実の実相の描写に依拠して、事実上、主流文学叙事に見られる民族士気の高揚についても疑惑を呈しているのである。蕭紅は魯迅の『阿 Q 正伝』、『孔乙己』に

於いて彫琢された人物形象の性格を規範としつつ、それらを意識的に超越することにより『馬伯樂』を執筆したと言える。蕭紅は、形式上長編小説の形式を採用して、国民性の描写を成し遂げ、題材としては当時の事件として「逃難」を選択している。蕭紅が男性を主人公として凡庸な大衆の日常を刻銘に書写した事は、ある種ジェンダー書写、性別による創作(Gender Writing)に対する反駁とも言える。

執筆者は更に、『馬伯樂』が、「抗戦文芸」から拒絶された事は、極めて合理的の様に見えて、その「合理」性は、実は特定の観点に制約されるとする。「抗戦文芸」によって諸作品に加えられる様々な制約や、変化する評価基準を除去した事で、「抗戦文芸」的な創作方法への依拠を自発的に拒絶し、「抗戦文芸」に拒まれた外延に於いて、却って『馬伯樂』の価値が構築された事は明晰である。その上「抗戦文芸」的な執筆方法を模して、「抗戦文芸」を前提として「抗戦文芸」の創作原則に反逆するかの様でもあると指摘する。蕭紅の『生死場』と『馬伯樂』は、抗戦文芸としての解読が可能であり、また政治宣伝と無関係な作品として解読する事も可能である。この様なパラドックスの生成は、蕭紅の叙述方法と個性に深く根差すものである。そして「民族国家」という宏大な叙事方法への関与は、そのパラドックスを超越するのみならず、彼女の創作に独異的な文学史的意義を賦与している。

【最終試験の結果の要旨】

口述試験は、1月22日 M406 教室にて、10時30分から正午まで行われた。全編を通して、本博士論文は筆者の豊富な想像力と、論理的謹厳さに裏打ちされた説得力を顕現しており、作品の深奥に潜入して解読、解析する論述も、審査委員から極めて高い評価を得た。又、執筆者は全ての質疑に対して流暢に、論理的且つ明晰に回答した。以て審査委員一同は、本博士論文を、本学博士学位授与に相応しいものと認め、全員一致で博士学位授与を決定した。